

The Art of Xylos

～Alex Jacobowitz, Marimba, ARTE NOVA Classics, BMG Entertainment～

低音のパイプの音が唸り、高音がすすり泣き、あるいは静寂の中に音の一粒一粒が溶けて行く。Alex Jacobowitz の最新録音「The Art of Xylos」は、多くの場合忘れられているこの楽器の本当の能力をわれわれの前に提示してくれる。



ある楽器がソロ楽器として確立するとき、必ずその曲をその楽器で演奏することの必然を生み出す演奏家が出る。Alex Jacobowitz は、マリンバにことってのそのような演奏家になる第一歩を踏み出しているといえよう。

[【The Art of Xylos を購入！】](#)

Jacobowitz の演奏は、思い入れのあまりカルパートを多用しており、それが故に、時として音楽の流れが破綻をきたしている。無難ということでは、アレンジモノで言えば、Safri Duo の Gold Rush だとか、Leigh Howard Stevens の Marimba When などが遥かに無難である。しかし、これらの演奏は、私にとっては、ピアノやチェンバロで聞いたほうがよくなってしまい、マリンバ演奏で聞く必然性が見当たらない。テクニク的には感心するのだが、純粋に音楽として聞く必然性が無いのだ。

それに対して、Jacobowitz の「The Art of Xylos」は、マリンバの響きの魅力を最大限に引き出して、音楽として提供している。広いダイナミックレンジ、音色のバリエーション、音が消えてゆく過程までも聞かせる彼の演奏によって、ここでは、パッハやベートーベンが、立派にマリンバの曲になっているのだ。

たとえば、この録音を聞くまでは、私にとって、ベートーベンの「月光」をマリンバで弾くなどということは、夢想だにすることができないことだった。あのピアノイズムの極地のような名曲を、ピアノ以外で弾くことなどありえなかったのだ。それが、この演奏を聞くと、ベートーベンは作曲のちょうど200年後、マリンバで演奏されることをも想定して書いたのではないかとまで思えてくる。(最後の2音の処理ががちょっと惜しいが！)

シューマンのトロイメライだってそうだ。この曲はホロピッツで聴くものと私にとっては相場が決まっていたのだが、Jacobowitz も良い線行っているのだ。モーツァルトの幻想曲も、「そう処理するかあ」という感じ(まあ、不満が残るところも数ヶ所あるが…)だし、パッハのシャコンヌも聞かせてくれる。(半音階的幻想曲も良いのだが、時々スケールの流れが止まるのが惜しい。)「展覧会の絵」も良い味を出しているし、「アルハンブラの思い出」も、初めての人が聞いたら、マリンバのための曲だと思うのではないか？

付随的なことではあるが、録音もすばらしい。人工的な残響を一切加えていないということだが、この録音は、Jacobowitz の弾くアダムスの5オクターブの楽器(1994年製のVan Siceモデル)とホールの響きを最大限に引き出している。特に低音と、空間に音が溶けて行く感じがすごいので、ラジカセなどではなく、ぜひしっかりと低音が出るステレオで聞いてほしい。(ヘッドホンよりもスピーカーで聞いたほうが気持ちが良い録音なので試してほしい。ヘッドホンだと、マレットがバーにあたる打音がちょっと気になってしまう。)

マリンバが好きであれば、ぜひコレクションの1枚に加えるべきCDだし、これまでマリンバにあまり興味が無かった方にも是非聞いていただきたいCDだ。